

第5回学習指導基本調査にみる中学校・高等学校での学習指導

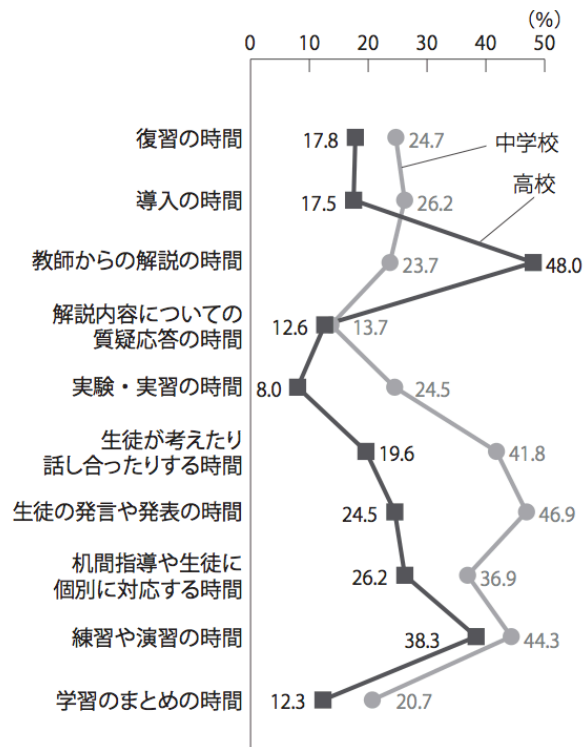
中井 弘一

ベネッセが2010年8月～9月（調査期間）全国の公立高校の校長および教員 [校長 830名（配布数2,000通、回収率41.5%）教員 4,791名（配布数12,000通、回収率39.9%）]に行った公立高校における学習指導の実態と教員の意識が冊子になって配付されている。インターネットで配信されているのでいつでも閲覧できる。

本誌は、巻頭言に「学力保障の時代における教育課題」として、まず、「子どもたちに身につけさせようとしている学力の質」に対し、小・中学校ともに、「基礎的・基本的な知識・技能を習得する学習」が8割近くを占め、「基礎的・基本的な知識・技能を 活用する学習」は4~5割にすぎず、「探究的な学習」は2割前後にとどまることをあげている。活用・探求型の授業が今後求められている割にはその実施率が低いことを危惧している。また、大きな課題として「教員多忙化の加速」をとりあげ、週末の土日の出勤率が高く、「教材準備の時間が十分にとれない」という教員が、中学校で8割強、高校で6割5分に及ぶとしている。日々の忙しさに悩みを感じる教員が多いということである。これで教育の改善がもめられるのだろうか。

中学校と高等学校の接続も大きな課題である。教育内容を異にするので、授業での指導方法が一定変わることは当然であるが、あまりギャップがあると生徒は戸惑うことにもなる。本調査では図1-1のように、「授業の時間の使い方や進め方に」差異が見られる。特に「生徒が考えたり話し合ったりする時間」「生徒の発言や発表の時間」を心がける比率にギャップが見られる。英語であれば「コミュニケーション英語」と新学習指導要領では科目名変更されているが、こうした時間が少なければ、求められている成果をあげることは難しいであろう。「教師からの解説の時間」が多い高校の伝統的な教養教育を意識した授業スタイルは今後変化を求められていくことになるであろう。かといって、技術の習得に終わるのでない。高等教育への橋

図1-1 授業の時間の使い方や進め方【教員調査】
(中学校・高校別)

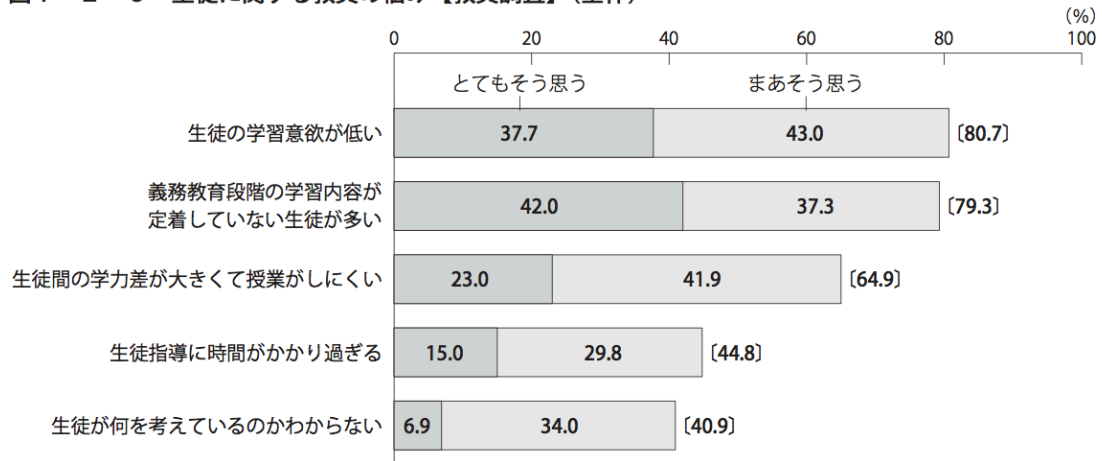


注) 「多くするように特に心がけている」の%。

渡しとなる一般的な教養も当然身につけられるべきもので、課題はそれをどのように身につけさせるかであろう。

高校の教員は、受け持つ生徒の学力の低さを悩みの大きな要素としてあげている。これは大学教員が、入学生の学力の低さを嘆く構図と同じである。中学校に行けばそのまま、中学入学生の学力の低さを課題としてあげることになる。だからといってもっと学力の高い生徒をと、無い物ねだりしても意味がない。目の前の生徒に向き合い、どう力をつけていくかが大きな課題である。

図1-2-6 生徒に関する教員の悩み【教員調査】(全体)

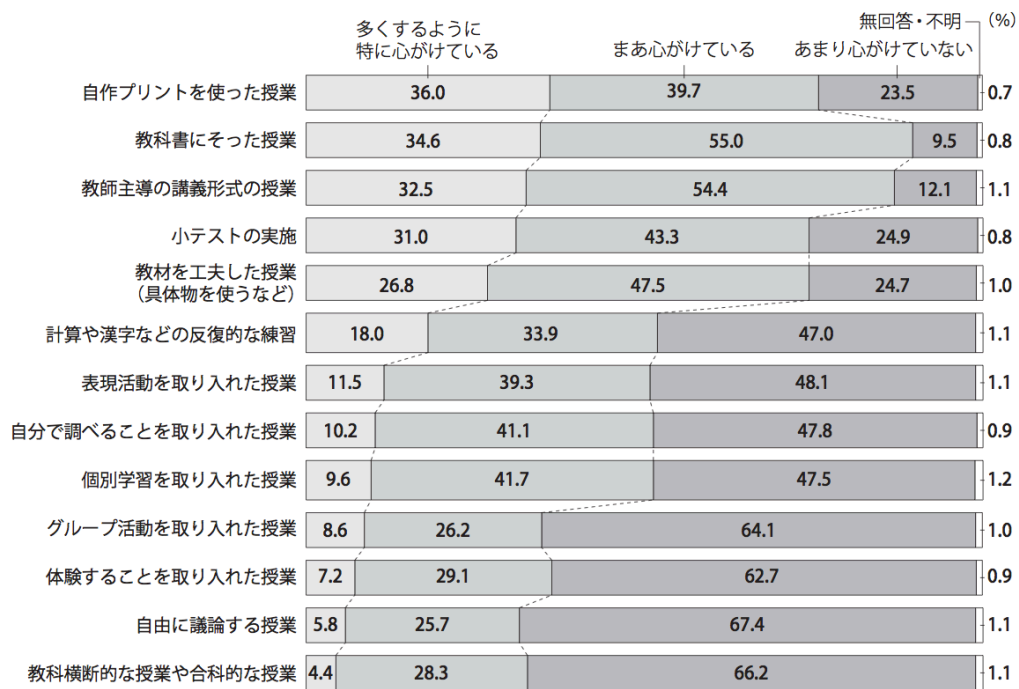


注1) 教員の悩みについてたずねた15項目のうち、生徒に関する5項目のみを示した。

注2) [] 内は「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

その一環としての授業の方法では、次のような結果であった。

図3-5-1 授業の方法【教員調査】(全体)



おそらくこの中で、「自作プリントを使った授業」や「教材を工夫した授業」が、目の前の生徒に応じた授業での指導につながるのであろう。問題はその工夫である。これは一人で背負い込んで考えることではなく、教科の教員で共有して考える同僚性とその発展の大きな要素であることは間違いない。

教育は生徒・学生のためにある。そのための労力は仕事である。日々忙しい環境ではあるが、教員魂で一歩ずつでいいから課題を乗り越えていきたいものである。

参考：

第5回学習指導基本調査（小学校・中学校版）

http://benesse.jp/berd/center/open/report/shidou_kihon5/sc_hon/index.html

第5回学習指導基本調査（高校版）

http://benesse.jp/berd/center/open/report/shidou_kihon5/kou_hon/index.html